

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13255

研究課題名（和文）小学校高学年児童の暗示的・明示的言語知識と英語運用能力の関係

研究課題名（英文）Implicit/explicit grammatical knowledge of fifth and sixth grade students in Japanese elementary school

研究代表者

内野 駿介（Uchino, Shunsuke）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80825456

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：What [a]sport do [b]you [c]like? の [a] whatに続く名詞，[b] 主語，[c] 動詞の各スロットに入り得る語に関する児童の知識の発達を測定するため，文法性判断課題，空所補充課題，メタ言語知識課題を用いて2カ年にわたり同一の児童を対象とした調査を行った。主な結果は次の3点である。第1に，児童の文法知識は小学6年生の1年間で発達した。第2に，ひとつの構造でもスロットの位置によって知識の習得度は異なっていた。第3に，暗示的知識や手続き的知識を身につけている児童はメタ言語知識を身につけている場合もあるが，規則の説明に文法用語はほとんど用いられていなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明示的な文法指導がほとんど行われていない小学校外国語の授業を通してでも，児童が暗示的知識を元にした英語運用能力を身につけていると考えられること，また言語使用経験を元に学習者自身が推論によって明示的知識の獲得に至る可能性があることは，言語活動を通じた言語習得を目指す小学校英語教育の在り方を肯定的に評価する研究結果であると解釈できる。また本研究は現行学習指導要領への移行期間に実施したものであり，2度の調査の間の児童の学習量は50単位時間であったことから，教科となり学習時間も増えた現在では，よりいっそう児童の知識が発達している可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The development of students' knowledge about the words that can be filled in the slots of [a] what, [b] subject, and [c] verb in the structure of What [a]sport do [b]you [c] like? was measured by the tasks of grammaticality judgement, gap filling, and metalinguistic knowledge. The main findings of the study are as follows. First, the students' grammatical knowledge developed during the sixth grade. Second, the degree of knowledge acquisition varied depending on the position of the slot, even for the same structure. Third, students who acquired implicit and procedural knowledge sometimes acquired metalinguistic knowledge as well, but grammatical terms were rarely used in the explanation of rules.

研究分野：教室内第二言語習得

キーワード：文法知識 暗示的知識 明示的知識 小学校英語 実態調査

1. 研究開始当初の背景

2020年度からの新学習指導要領において、従来小学校5,6年生で行われてきた「外国語活動」が3,4年生に早期化され、5,6年生は教科「外国語」として、英語の知識・技能を児童に身につけさせることが求められるようになる。しかしながら、小学校外国語教育を通して児童がどのような言語知識を習得可能であるか、どのような知識が英語運用能力に寄与するのかについてはこれまでに明らかにされていない。近年の第二言語習得研究においては、第二言語知識は明示的知識 (**explicit knowledge**) と暗示的知識 (**implicit knowledge**) に大別して捉えられている。明示的知識は「主語が三人称単数で現在時制の時は一般動詞に **s/es** をつける」のような言葉で説明できる (意識できる) 知識であり、暗示的知識は「ここは **the** ではなくて **a** のような気がする」のような言葉では表せない (意識できない) 知識である (鈴木, 2017)。

言語能力の熟達化の観点からは、小学校英語教育は暗示的知識の獲得に主眼を置くべきであると主張されている。板垣(2017)は言語能力を定型表現依存型運用能力 (暗示的) と文法知識依存型運用能力 (明示的) の複合体と捉え、小学校段階では主として前者の獲得を目指すべきであると述べている。文部科学省により発行された小学校外国語教材 *Hi, friends!* や新学習指導要領対応教材 *We Can!* はトピックシラバスで構成されており、児童は単元の目標表現を覚えて (定型表現として) コミュニケーション活動を行う場合が多い。板垣 (2017) はこの定型表現の積み重ねが暗示的知識の獲得につながり、やがて明示的な文法規則に依存した言語運用ができるようになるプロセスを仮定している。What ... do you like? という表現を例にとると、初期段階では **What color do you like? What sport do you like? What animal do you like?** などの表現を個々に覚えて発話するが、複数の定型表現を覚えるうちに「...の部分が可変である」という文法規則に従って理解、産出されるようになる。この内部構造の把握は質的に直感的・暗示的であるが、言語経験の蓄積によって徐々に抽象的・明示的文法知識の獲得に繋がると考えられている。

しかしながら、小学生の言語知識に関する実証研究はこれまでにほとんど報告されておらず、児童がどのような言語知識を習得しているか、習得可能であるかについては明らかにされていない。また明示的知識、暗示的知識が実際のコミュニケーション能力とどのような関係にあるかについても、小学校英語教育の文脈においては調査されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人小学生が持っている英語の文法知識について、明示的知識・暗示的知識の観点からその実態を明らかにすることである。合わせて、それらの知識と児童の英語運用能力の関係についても検討する。

3. 研究の方法

What [a] do/can [b] [c]? (例: **What food do you like?**) の表現を調査対象とし、文法性判断課題 (**grammaticality judgement test: GJT**)、空所補充課題 (**gap filling test: GFT**)、メタ言語知識課題 (**metalinguistic knowledge test: MKT**) を用いて公立小学校の5,6年生の文法知識を測定した。GJT及びGFTの結果は参加者の文法知識の総体を、MKTの結果は参加者の明示的知識を反映しているものとして解釈した。2カ年にわたって同一の協力校1校で調査を行い、両方の調査に参加した71名の児童のデータを分析することで、1年間の学習を通じた知識の変容について検討した。

4. 研究成果

<調査1>

GJT及びGFTの結果の素点の学年ごとの基本統計量は表1に示す通りであった。また、それぞれの課題についてラッシュ分析を行い、各参加者の能力推定値を算出した。能力推定値の学年ごとの基本統計量は表2に示す通りであった。GJT, GFTともに、能力推定値の平均値は5年次よりも6年次で有意に高く、1年間の学習を通して児童の文法知識は伸長したことが明らかになった。GJT: $t(70) = 3.571, p < .001, \Delta = .43$; GFT: $t(70) = 2.590, p = .012, \Delta = .34$ 。

表1. GJT及びGFTの素点の基本統計量

	GJT				FBT		
	N	M	SD	95%CI	M	SD	95%CI
5年次	71	13.18	2.81	[12.52, 13.85]	12.21	4.37	[11.18, 13.24]
6年次	71	14.27	3.22	[13.51, 15.03]	14.03	4.83	[12.89, 15.17]

注. どちらの課題も24点満点。

表 2. GJT 及び GFT の能力推定値の基本統計量

	GJT				FBT		
	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	95%CI	<i>M</i>	<i>SD</i>	95%CI
5 年次	71	0.26	0.55	[0.13, 0.39]	0.29	0.74	[0.11, 0.46]
6 年次	71	0.50	0.57	[0.36, 0.63]	0.54	0.78	[0.36, 0.73]

What [a] do/can [b] [c]? における空所[a-c]のそれぞれについて、項目困難度と平均値を比較したところ、項目困難度の平均値が最も低いのは[c] 動詞(-0.44) であり、次いで[b] 主語 (0.11)、[a] what に続く名詞 (0.24) の順であった。また正答率の伸びは大きい順に[a] 10.9%、[b] 9.9%、[c] 7.0%であった。すなわち、困難度の高いスロット (正答率の低いスロット) ほど、1 年間の学習による伸び率が高いという結果になった。

MKT は空所[a-c]に入り得る語の共通点を日本語で記述する問いであった。対応する GFT の設問の得点が満点であった参加者、すなわちその言語項目を正しく運用できる参加者の回答に着目し、児童の回答を分類した。[a] what に続く名詞の回答は、「物の種類/まとまり」「物/生き物」「類似の表現との混同」「異なる同紙との混同」の 4 つのカテゴリに分類された。このうち、空所[a]の説明として最も尤もらしいものは「物の種類/まとまり」であるが、このカテゴリに分類されたのは分析対象となった 24 名の回答のうち 4 名分のみであった。[b]主語の回答は「人/人物」「文中の他の語の意味」の 2 つのカテゴリに分類されたが、分析対象の 33 名中 31 名の回答が「人/人物」に分類され、この空所に関する言語運用能力とメタ言語知識の関係は極めて強いことが明らかになった。[c]動詞の回答は「ペット/動物」「動き/動詞の具体例」「人に聞く/答える」「感情/気持ち」「事柄/物事」の 5 つのカテゴリに分類された。

分析の結果、以下のことが明らかになった。第 1 に、児童の文法知識は小学 6 年生の 1 年間で発達した。第 2 に、スロットの位置によって知識の習得度は異なることが明らかになった。[a] what に続く名詞は適格性が文脈に左右されるため困難度が高かったが、タイプ頻度が高いことで 1 年間での伸び幅は大きくなった。[b] 主語については正しい知識を身につけている児童がいる一方で、類似の表現との混濁が起こっている様子も見て取れた。またこのスロットについては暗示的知識や手続き的知識が身につけている児童のほとんどが明示的知識も有していた。[c] 動詞は 5 年次の正答率が比較的高く、他の項目と比べて困難度が低かったが、1 年間の学習を通してこのスロットに入り得る単語と what に続く名詞の関係性についての理解が更に進んだ。第 3 に、暗示的知識や手続き的知識を身につけている児童はメタ言語知識を身につけている場合もあるが、文法用語はほとんど用いられておらず、児童なりの言葉で規則の説明が行われていた。

本研究においては、採用した課題の特性上、児童の暗示的知識のみを直接測定すること、及び児童の英語運用能力と文法知識の関係性について検討することはできなかった。これらの課題については本研究課題終了後も継続的に取り組み、論文等で研究成果を発表する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 萬谷 隆一、堀田 誠、鈴木 涉、内野 駿介	4. 巻 22
2. 論文標題 小学校英語に関する先行研究の収集と統合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JES Journal	6. 最初と最後の頁 200～215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.22.01_200	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 内野 駿介	4. 巻 21
2. 論文標題 小学6年生の文法知識の発達 文中の入れ替え可能な語に関する知識に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JES Journal	6. 最初と最後の頁 143～158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.21.01_143	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 内野 駿介	4. 巻 19
2. 論文標題 小学 5, 6 年生の文法知識 文法性判断課題, メタ言語知識課題の結果から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JES Journal	6. 最初と最後の頁 162～
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.19.01_162	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 内野駿介	4. 巻 68(5)
2. 論文標題 小学生はどのような文法知識を持っているか 知識の明示性と文法項目による違いに焦点を当てて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀澤 拓磨、内野 駿介、萬谷 隆一	4. 巻 19
2. 論文標題 日本人中学生の明示的・暗示的文法知識 学年間及び文法項目間の違いに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 HELES Journal	6. 最初と最後の頁 100～115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24675/helesje.19.0_100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 UCHINO Shunsuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Japanese Young EFL Learners' Grammatical Knowledge of English: From the Implicit/Explicit Perspective and Knowledge About Internal Structures of Expressions	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Doctoral dissertation, Tokyo Gakugei University	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平山 伸正、内野 駿介	4. 巻 74
2. 論文標題 小学5年生の外国語科授業における訂正フィードバックの効果に関する共同生成的アクションリサーチ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要. 教育臨床研究編	6. 最初と最後の頁 105～120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32150/0002000100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 平山伸正・内野駿介
2. 発表標題 小学校高学年の授業における訂正フィードバックの効果 リキャストを中心にした実践の報告
3. 学会等名 第22回小学校英語教育学会四国・徳島大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内野駿介
2. 発表標題 児童が固まりとして認識している文構造の知識 誘引模倣課題の結果から
3. 学会等名 第21回小学校英語教育学会関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 萬谷隆一, 堀田誠, 鈴木渉, 内野駿介
2. 発表標題 小学校英語に関する先行研究の収集と統合
3. 学会等名 第21回小学校英語教育学会関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内野駿介
2. 発表標題 小学6年生の1年間における児童の文法知識の発達 プレハブ表現の可変部に関する知識に着目して
3. 学会等名 第20回小学校英語教育学会中部・岐阜大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内野駿介
2. 発表標題 児童は英文の内部構造をどのように認識しているか want, want to, want to beの使い分けに着目して
3. 学会等名 日本児童英語教育学会第40回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内野駿介
2. 発表標題 高学年児童の文法知識 what疑問文の内部構造に関する知識に焦点を当てて
3. 学会等名 第19回小学校英語教育学会北海道大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内野駿介
2. 発表標題 文法性判断課題における時間制限と文法性の影響 日本人小学生を対象とした場合
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会第43回神奈川研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内野駿介
2. 発表標題 英文の内部構造に関する児童の知識 明示的な理解はどこまで進んでいるか
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shunsuke UCHINO
2. 発表標題 Examining Japanese Students' Grammatical Knowledge: From the Results of Timed and Untimed Grammaticality Judgement Tests
3. 学会等名 2nd International Conference on Child Foreign/Second Language Learning (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 鈴木渉, 佐久間康之, 寺澤孝文	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 188
3. 書名 外国語学習での暗示的・明示的知識の役割とは何か	

1. 著者名 萬谷隆一, 志村昭暢, 内野駿介	4. 発行年 2024年
2. 出版社 開隆堂	5. 総ページ数 319
3. 書名 小学校英語教育の理論と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------